

令和6年度中山間地域・地域ビジョン策定地区連絡会議

1 概要

中山間地域・地域ビジョン策定地区連絡会議は、三原市中山間地域及びその他の地域で地域ビジョンを策定している住民組織や今後地域ビジョンの策定を検討している住民組織を対象として、地域づくり及び住民組織の運営に関する問題点・課題や先進的な取組に関する情報交換、情報共有を図るとともに、住民組織相互の交流を推進するために開催しています。

2 日時

令和7年2月4日（火）14時～16時

3 場所

三原市役所3階 304・305・306会議室

4 出席者

中山間地域・地域ビジョン策定地域の役員など 32名（内オンライン参加5名）

5 プログラム

(1) 事例発表

泉自治区における地域ビジョン策定から見直しに至る取り組みについて

(2) 意見交換

泉自治区の取り組みについて

地域外等と連携（情報発信・つながり）した取り組みについて

(1) 事例発表内容

泉自治区では、広島県が実施する「集落アドバイザーによる地域協議サポート事業」※を受け、令和3年に策定した地域ビジョンの見直しに取り組んでいる。

地域ビジョン策定から見直しに取り組むまでの経緯・活動の様子について発表していただいた。

※「集落アドバイザーによる地域協議サポート事業」とは

発表者	広島県地域政策局中山間地域振興課
- 令和5年度2町（安芸太田町・神石高原町）と共に、中山間地域の将来を考えるため、集落対策調査を実施 - 集落対策検討会議を経て、令和6年10月「第Ⅱ期広島県中山間地域振興計画（集落対策の推進）」を策定 - 本事業は、早期に着手すべき事項である「住民自治組織の合意形成をサポートする中間支援機能の構築」のための取り組みである。 - 事業の目的及び概要	
令和6年度広島県集落対策 集落アドバイザーによる地域協議サポート事業 事業目的 住民の皆さんが安心して暮らすことのできる持続的な地域づくりを実現するためには、地域において将来展望やそれを踏まえた取組の推進、人口減に対応した地域の運営の見直しを図るための協議や意思決定が必要になります。 こうした地域での議論を円滑に進めていくため、集落アドバイザー（地域づくりに関する専門的な知見を有した人材）を派遣し、地域の取組を伴走支援することで、次世代に受け継いでいく基盤の再構築を目指します。 ■ こんな地域のみなさんの話し合いをサポートします！ - 将来への漠然とした不安はあるが、何をどう検討していけばいいかわからない。 - 住民自治組織で検討したい事項があるが、いつものメンバー（役員）だけでは新しいことを始めたり、活動の見直しをしにくい。 - 地域で取り組んできた行事が多すぎて、継続していくには負担が大きすぎる。など 地域を維持していくために、なんとかしたいが、どうやって進めたらいいかわからない。	令和6年度広島県集落対策 集落アドバイザーによる地域協議サポート事業 取組内容 - 暮らしの現状や課題、将来的な展望をお伺いするヒアリング調査を実施し、地域の暮らしを守るよう、今後の取組の方向性を検討する上での基礎資料を作成していきます。 - 住民自治組織で話し合っておく必要のある課題の選定や話し合いの進め方を考え、地域住民の皆さんの意見を出し合う機会をつくっていきます。 - そうした機会に、意見をまとめ、議論を円滑に進める人材を県から派遣し、役員や住民の皆さんの話し合いのサポート※を行います。（※人材派遣は複数回可） 集落アドバイザーによる伴走支援の取組イメージ 4つのステップで地域をサポート！ ①地区・集落カルテの作成 - データ収集・分析 - ヒアリング・アンケートによる現状・課題・将来展望把握 - 検討課題の抽出 ②検討テーマの設定 - 検討テーマの地元合意 - 最終の到達目標の設定 - 今年度の到達目標の設定 - 地域における研修会の開催 ③具体的検討の実施 - 最終目標・今年度到達目標を踏まえた必要な取組の検討 - 具体的な取組の試行 - 計画等の策定 ④検討結果、取組結果の共有・評価 - 検討結果、取組結果の関連主体間での共有 - 検討結果、取組結果の評価 - 次年度以降の方策検討 集落アドバイザーの役割 - 地区・集落カルテを作成し、地域の実態を客観的に知る！ - 地域の将来の方向性を共有しよう！ - 具体的な取組の実施に向けて一緒に考えよう！ - 継続的かつ自律的な取組となるよう成果を共有しよう！ ※ 地区・集落カルテ：地区・集落の人口・年齢構成、世帯数、住民自治組織の活動状況、住民生活の基礎情報等を開取り整理し、地区・集落の元来度や問題点を一覧で把握できる調査票のことです。
【令和6年度広島県による具体的な取り組み】 ① 地域へのヒアリングの実施 ② 地区・集落カルテ作成のためのアンケートの実施 ③ 地域ビジョンの見直しに向けた中間評価の実施 ⇒ 泉自治区で実施 ④ 地域に住む現役世代の交流会の開催 ⑤ 勉強会・セミナーの開催による意識啓発	

事例発表：「泉自治区における地域ビジョン策定から見直しに至る取り組みについて」

発表者	・ 泉自治区役員のみなさん ・ 集落アドバイザー (広島県受託事業者) 公益財団法人中国地域創造研究センター
【集落アドバイザー】 ・ 中山間地域の直面する課題の多様化、人口減少により、住民が安心して暮らせる生活環境を維持していくためには、地域にも変化が必要となってくる。 ・ コロナ禍を経て、住民自治活動の再開に労力がかかり、従来担い手だった人の引退、若い世代の絶対数の減少などの課題から、今までどおりには地域運営を進められないという状況にある。 ・ このような状況の中、地域を見つめ直す、変化に向けての活動の働きかけを支援することが、広島県の「集落アドバイザーによる地域協議サポート事業」である。 ・ 本事業において、泉自治区における地域ビジョンの見直し作業のサポートをしている。 ・ 泉自治区では、住民参加型のワークショップなどを開催し、令和3年に地域ビジョンが策定された。コロナ禍により、事業実施が難しかったという話も聞いたが、策定からこれまでの取り組み状況について教えていただきたい。 【泉自治区】 ・ 将来を担う世代が希望を持ち続けることができるような社会、持続可能なまちづくりをめざし地域ビジョンを策定した。「誰もが郷土を愛し、いきいきと支え合いながら暮らす「泉」の実現に向け、具体的な数値目標（KPI）を設定し取り組んでいる。地域住民一人ひとりが地域づくりの主役であり、推進役であるということを意識しながら各事業を盛り込んでいる。 ・ 地域ビジョンの取り組みについては、コロナ禍を経て、やっとスタートが切れたという状況にある。 【集落アドバイザー】 ・ 地域ビジョン策定では、ワークショップによる住民の意見を聞くなど、夢のある前向きな内容も盛り込まれている。地域ビジョンには、117の事業があり、全て実施するのは難しいと考える。一旦、今やろうとしていることの棚卸しをすることを提案した。 ・ 「今の進捗状況」「いつやるべきか」「誰がやるのか」など定めていくことで、事業が実施しやすくなる。	



- ・各事業について、「進捗状況」と「優先順位」を基に整理をした。
- ・地域みなさんと共有することができる視覚化した資料をつくることは重要である。
- ・資料作成においては、役員みなさんに作業をしていただいた。実施した感想について教えていただきたい。

【泉自治区】

- ・はじめに、各役員が各自 117 の事業について考えをまとめ、その後、役員が集まり優先順位などを話し合った。いろんな事業が絡み合っており、まとめるのは難しかったが、これだけはやっておかなくてはならないことの絞り込みを行った。
- ・役員の中で意見を取りまとめた。今後は、事業を進めるにあたり、地域みなさんが参加できるように取り組んでいかなければならない。どのようにしてみなさんと一緒に取り組んでいけるか相談しながら進めていきたい。
- ・117 事業について確認できたことは大きかった。お祭りなど主な行事は力を入れて取り組んできたが、日常生活上に起こるお困りごとなど様々な事業があり、次につながるアクションを起こすための基本的な認識という点で、棚卸しできたことは非常に大きかった。

【集落アドバイザー】

- ・次のステップとして、具体的にそれぞれの事業の優先的に取り組むもの、また、誰がやるのかということを整理する必要がある。
- ・現在、中学生以上の全住民を対象としたアンケート調査を実施し集計している。地域のいろいろな活動に対して、どういう取り組みだったら「参加したい」「協力したい」と思われているかわかれば、声がけしていくことで事業実施の可能性がみえてくる。
- ・人材発掘もアンケート調査で実施することができる。
- ・地域の戦力は地域住民だけではない。出身者にも協力してもらえないかということで、ご親族の方にご協力いただき、地域外に居住の出身者に対しアンケート調査を実施した。「地元に戻ってきて一緒に活動したいことはあるか」など、聞き取りを行い、

泉地域ビジョンの中間評価②

「いつやる？」（進捗状況×優先順位による対応評価）

- 着実な実施を継続する事業
- 優先的に具体的な取組方針を検討すべき事業
- 事業化の準備を進める事業
- 事業化に向けた検討を急ぐべき事業

1 高齢者等が安全安心に暮らせる地区づくり(22 事業)

	最優先（1～2年以内）	優先（2～3年以内）	計画期間内（3～5年以内）	長期的な視点で実施（4～10年）
完了	○ 東コミュニティホームで常設の高齢者サロンの開設の検討			
計画以上計画通り		○ 高齢者等が収入を得られる場づくり ○ 一人暮らし高齢者などに対する隣近所での見守り、相談支援 ○ 関係主体の連携による定期的な訪問の実施 ○ 久井町集合タクシーはなさく号の利用促進 ○ 移動スーパー（とくし丸等）運行の利用促進 ○ ゴミ分別袋の配布、ゴミ分別の講習、資源ゴミ回収などの支援 ○ 健康づくり、生涯学習・スポーツ活動の場の整備、活動の充実		
計画遅れ		○ 泉合同サロン（ふれあい学習教室）の増回の検討 ○ 3 B 体操、卓球クラブなどの活動の維持、活動内容の充実 ○ 子どもとの交流を行い、昔遊び、伝統芸能などの伝承 ○ 活動の周知の強化（高齢者への参加の働きかけ） ○ 路線バス（徳良線）の増便の働きかけ ○ 近隣住民の協力による「ゴミ出し」の支援 ○ ちょっとした困りごとを支援する組織づくり	○ 経験・知識を活用した特産品、郷土料理づくりの推進	
未着手			○ 弁当配達と見守り訪問の実施（休日昼） ○ 高齢者等に対するパソコン・スマホの普及、勉強会の開催 ○ 高齢者等のスマホ活用の支援	○ 御用聞きサービスの検討 ○ オンラインによる見守り、診療、情報提供などへの活用

ビジョンの中間評価を受けての新たな動き

「誰がやる？」+α（新たに必要なことは？）

➤ 出身者アンケートの実施（出身者の地域活動意向把握、人材発掘）

問6 あなたは実家周辺の地域活動（自治会、清掃活動、お祭りなど）に参加することがありますか。（○は1つ）

1. 参加することがあり、今後も引き続き参加したいと思う	4. 参加しておらず、今後も参加しない（できない）と思う
2. 参加していないが、今後、参加したいと思う	5. その他（ ）
3. 参加することがあるが、今後は参加が難しくなると思う	

問7 問6で「1」または「2」と回答した方にお聞きします。参加することがある、または、参加したいと思う地域活動にはどのようなものがありますか。（○はいくつでも）

1. 草刈りなどの清掃活動	4. 地域の伝統文化の継承
2. 地域のイベント（お祭り、運動会など）への参加	5. その他（ ）
3. 自治会等の会合への出席	

どの程度可能性があるのか調査をしている。

- ・さらに地域の方と共有するため、「泉の未来を語るワークショップ」を開催する。地域の役員のみなさんや住民の方に参加していただき、話し合いの場を設ける。地域ビジョン策定以降、地域でどんな変化があったのか地域の方からも話を聞きたい。その上で、長期的な泉地区の展望、イメージとして固めていくという作業を進め、未来の泉地区のために、今後5年間で何を実施していくかを取りまとめていきたい。
- ・今回のように、私たち外部の人間が入って地域づくりに参画するということについて、どのような感想を持たれたか。

【泉自治区】

- ・地域住民の方々、さらには、出身者の方々にもアプローチしていくというプロセスを踏んだ中間評価の取り組みは、自分たちだけではなかなか難しい面もある。アドバイスなど伴走支援をいただき感謝している。本事業を受け、来年度に向け取り組みを深めていきたい。

【集落アドバイザー】

- ・地域ビジョンの中間評価においては、現状を可視化し、これをさらに詰めていき、取捨選択することも、必要になってくるのではないかと。ただし、地域ビジョンの中に書いてあることは、地域のみなさんから出された夢やニーズであるため、計画には残しておき、取り組めるようになったら実施するという考えでよいのではないかと。次年度以降、泉自治区では、こういった取り組みを、どのような体制で進めていくお考えであるか。

【泉自治区】

- ・117事業以外にも、アンケート調査やワークショップで様々な貴重な意見をいただけると期待している。その意見を、住民が一緒になって、仕組みづくりや事業実施につなげていきたい。また、全国にいる出身者が、ふるさと泉地域に帰ってこられ、いつまでも変わらない良きふるさとだと思っていただけるような地域づくりを進めていきたい。

ビジョンの中間評価を受けての新たな動き

地域を巻き込んだビジョン見直し

- 「泉の未来を語るワークショップ」の実施（2月9日開催予定）

○各地域役員・住民の参画による話し合いの場の設定

【話し合いのテーマ】

- ・地域ビジョン中間評価等の共有
- ・地域ビジョン等策定以降、泉地域の変化を話し合い
- ・長期的な泉地域の展望のイメージ
- ・未来の泉地域のために今後5年間でやるべきこと



(2) 意見交換の内容（主な意見）

テーマ1 事例発表についての感想について

（泉自治区の取り組みについて）

- ・事業数が117もあり多くて驚いた。
- ・地域の人達の話聞く場をたくさんつくっていると感じた。
- ・現在、地域ビジョン策定のためのアンケート調査を行っており、地域の人の話を聞く場は大事だと感じた。参考にしたい。

（計画の見直しについて）

- ・地域ビジョン策定後、5年目となるため見直しを検討している。策定時（5年前）のことを忘れていたため、中間見直しというのは良いと思った。
- ・地域ビジョンの見直しをすることで、新たな人に集ってもらい、新たなつながりができる可能性があると感じた。
- ・地域ビジョン策定後2年半経ち、見直しの必要性は感じているが、見直しのきっかけづくりが難しい。事業をするので精一杯な状況である。
- ・2年前に地域ビジョンを策定しているが、事業の見直しなどはできていない。

（交流・参加状況について）

- ・過去3か所で実施していた「とんど」を1箇所統合した。同じ地域に住んでいても知らない人もおり、年に1度でもみんな顔合わせる機会にできればと考えて行った。
- ・毎週土曜日に自治区で住民交流カフェを運営している。地域住民の集まる拠点、情報交換の場となっている。
- ・地域では、サロン活動などを行い、地域内で交流を行っている。
- ・自治区をPRするためイルミネーション点灯を若い人に企画してもらった。若い人同士のコミュニケーションの場・出会いの場になった。
- ・コロナ禍が終わり、今後活動していくには、声かけ等が必要である。盆踊りを再開するため、各戸にチラシを入れたところ、多くの若い人が参加し驚いた。
- ・コロナ禍以降閉鎖的になり、地区の役員などが会議などに出なくなっている。
- ・行事に出てこない人にどうやったら出てきてもらえるかを検討している。集まれるスペースづくりを考えており、座ってコーヒーが飲める場所、さらに精米機を置いたらみんな集まるのではないかと考えている。
- ・「行事をしても決まった人しか来ない」というのに共感した。当町内会でも来ない人は誘っても来ない。
- ・会議、イベントへの参加者を集めるのに苦労している。いい方法がないものか。
- ・地域の行事に参加していただきたいが、それもできない厳しい状況にある。
- ・行事参加者は高齢者ばかりでなかなか集まらない。

テーマ2 地域外との連携について

（他団体交流について）

- ・「とんど」や「運動会」を小学校と連携して実施している。運動会はコロナ禍以降、平日にするようになっていたが、学校に相談し、地域の人に参加できるよう週末にしていた。
- ・小学校と連携している。学校から年間行事予定をもらい、一緒に活動している。例えば、「とんど」では、組み上げを町内会で行い、小学生に結んでもらっている。
- ・町全域の研修旅行を行っている。違う区の人との交流や訪問先の人との交流ができた。
- ・広域サロンとしてのコミセンカフェを運営している。また、連合町内会の行事として、各種まつりを開催している。
- ・他の住民組織などに関わりを持ちたいがどうしていいのかわからない。きっかけがない。

（イベント実施などについて）

- ・町内の各種団体（7団体）が力を合わせて、年1回マルシェを開催している。マルシェには地域外からの参加もあり、毎年約500人が訪れる。
- ・空き家対策として町内会が一棟貸しの宿泊所を整備・運営している。開所後から現在まで、外部からの宿泊で200名、日帰りで100名、オートキャンプ利用が2件あった。
- ・レンコン掘りのイベントをやっている。参加費をもらい、地域外の人が30人くらい来てくれた。参加者に喜んでいただき、地域の人が進んで準備をしてくれた。
- ・子どもを呼べるようなイベントが地域にとって良い。子どもが来れば親も来るため、さらに参加する人が増える。
- ・マルシェを開催している。（地元住民による野菜市、三原プリンの販売、キッチンカーの参加によるイベントの盛り上げ）
- ・どの行事へも同じ参加者になっている。（参加者の固定化）

（出身者について）

- ・地域の方の協力で、地域外に住む親族や関係者に対して地域情報（便り）を届けてもらっている。
- ・盆に帰省された出身者の方に、祭りに参加してもらえよう受け入れの準備をしており、多くの方に参加してもらっている。

まとめ

各外部アドバイザーからの意見

- ・住民組織のみなさんは、人が集まる取組、地区相互の連携・交流など、各地区ですばらしい活動をされている。お互いがもっと情報交換しながら、活動の質を高めていただきたい。
- ・人材も少なくなってきており、班・組・区といった一番小さい基礎組織は非常に厳しい状況になっていると聞く。その問題も、一緒に考えていかなければならない。
- ・人口減少が進む中、今と同じ状況で地域を守っていくことは難しくなる。今の役員のみなさんが次の世代に譲るときには、少し業務を軽くしながら、引き継いでいくことも考えなければならない。
- ・地域の中だけの人で頑張るのが難しければ、班の統合や地域間の連携という手段もある。
- ・出身者の協力を得る手段もある。出身者への連携は、世帯を通じて連絡するのではなく、出身者を LINE グループでつなげ、連絡を簡略化し協力依頼する事例もある。
- ・出身者の 3～4 割は車で 30～40 分のところに住んでいるという調査結果がある。近くに住まれている方から地域に巻きこんでいくことも手段の一つである。
- ・地域の中で連携し、声かけをする。スタートは地域の楽しいイベントへ誘ってみる。
- ・出身者の知り合いなど外部のネットワークを巻き込んでいくことも期待できる。
- ・今の世代が地域活動を自ら抱え込むのではなく、誰かに手伝ってもらう声掛けをすることは、次の世代が地域を支える際に、自分たちも誰かに手伝ってもらおうという考えのもと取り組むことができるきっかけにもなり、負担軽減につながる。